感謝のことば

実習が始まる一週間前、私が参加しているボランティア先での事でした。そこでお世話になっている方に、実習のためしばらくお休みする旨を伝えると、あることを伺いました。実は、その方のご両親が終活の一環として献体登録されたということ、そして、将来千葉大学にお世話になるかもしれないということでした。

身近な方のご家族が、献体に協力してくださることに驚きつつも、それがどういうことを意味するのか、そのときの私は、よく理解できていませんでした。献体について、文字の上では理解していたつもりでしたが、私には、どこか遠い世界の話だと感じていたのだと思います。それよりも、これから始まる解剖実習への期待で、どことなく高揚感のようなものを感じていました。

そうして迎えた実習初日、初めて実習室に足を踏みいれると、目の前の実習台には、白い布で覆われたご遺体の先生がいらっしゃいました。その光景を目にしたとき、私は衝撃を受けました。高揚感は一気に消え、全身に緊張が走り、これから始まる実習の重大さを痛感しました。実習は背中の解剖から始まりました。初めてご遺体の先生にメスを入れた瞬間、ふと気づくと、緊張のあまり手が少し震えていたことは、今でも鮮明に覚えています。

実習では、教科書や実習書を手がかりにして、ご遺体の先生の筋肉や血管、神経、臓器などを学んでいきます。わかりやすく単純化されたイラストとは異なり、リアルな人体の構造を立体的に捉えられるようになったのは、実習がある程度進んでからのことでした。私のご遺体の先生は、心臓の血管が一般的な構造とは異なっており、教科書からではなく、ご遺体の先生からしか学べないことも多いのだと実感することができました。

そして、ご遺体の先生は、医師としての責任も教えてくださいました。初めは、ご遺体の先生に対面するたび、ただただ緊張するばかりでしたが、先生は医学生である私たちを信頼し、私にとって、初めての患者になってくださったのだと感じるようになりました。先生の託してくださった想いに私は応えることができているのだろうか、医師としての責任とは何か、こう自問自答することは、解剖が終わった今も続いております。今まで単なる学生としてしか自分をとらえてこなかった私ですが、将来医師になる者としてどう行動するべきかと考えるようになりました。

こうして迎えた実習最後の講義にて、解剖実習が実現できているのは、ご遺体の先生だけでなくご遺族の方のおかげでもあることを忘れないでほしいと、と教えられました。ご遺族は先生のお骨が返ってくるまで何年も待っておられる。ーそれを初めて知った時、私は、真っ先に実習前の出来事を思い出しました。あの時、『医学部の皆さんにお世話になりますね』と言ってくださったボランティア団体の方は、どのような思いで、ご両親の献体登録を受け入れてくださったのだろうか。愛する家族のご遺体を医学部生に託すという選択に、どれだけの覚悟を必要とされたのだろうか。それを思ったとき、私は言葉に表しきれないほど、感銘を受けました。そして同時に、医師になる自分に課せられた役割の重さを、身に染みて感

じました。多くの方の想いに支えられ、医学を学ぶ自分があるのだと実感した時、医師になる覚悟がより一層固まっていくのがわかりました。

3か月にわたる解剖実習を終えた今、私は、ご遺体の先生、ご遺族の皆様が私たちに託してくださった想いを、決して忘れてはならないのだと深く感じています。

医学の基礎となる「人の体」を、深く学ぶ機会を提供してくださったことに、改めて心より感謝の意を申し上げます。

私たちは、必ず良い医師になります。本当にありがとうございました。

医学部　３年生代表